

石川淳選集

第十四卷

石川淳選集 第14巻 (全17巻)

1980年12月8日 第1刷発行 ©

定価 1300 円

著 者 いし かわ じゅん
石 川 淳

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

夷齋清言

ワ
ビ

花

髪

袋草紙

和歌押韻

蝦夷日誌

譜

狂歌百鬼夜狂

七

九

二四

三七

五〇

五五

六九

九二

一〇五

珍珠船	二〇
和訓	二三
畸人	二四
東坡禪喜	二六
江戸人の發想法について	二七
江戸文學について	二八
石 濤	二九
京傳頓死	三〇
蜀山斷片	三一
秋成私論	三二
樊噲下の部分について	三三
五十音圖について	三四

南畫大體

二三五

蕪村風雅

二七九

宗達雜感

二八八

玉堂風姿

二九二

病草紙斷簡

三〇〇

荻生椿

三〇三

椿

三〇九

一夜百詠

三一五

評論隨筆

四

夷齋清言

言もと清濁なし。志高ければすなはち清む。ただ才に庸雋あり。才短ければ言おのづから暢びず。およそ筆端の良工にして氣爽才麗の俊傑にあらざるはなかるべし。されば文心雕龍にも、理得て事明かに心敏にして辭當るとは説かれたり。かの六朝の諸君子、清峻の志を持して、これを言に發するに簡約玄澹なるがごときものは、けだし謂ふところの金相玉質の高人か。しかも、宋儒これを譏つて清言亂を致すとなせり。余もとより菲才、身に縛鶏の力なく、たとひ亂を致さんと欲するも、塞上いづこに烽火をあぐべけんや。ただ平常柔翰を弄ぶことに於ていささか癖あり。すなはち、漫に好むところに従つて、明哲の遺芳を群籍の中にたづね、その香草を拾つて冊子に編み、これに題して清言といふ。みづから憐れむ、賣文またはなはだ紙魚のわざに似たることを。ときに峽中の風聲客腸を斷つて落葉崢嶸たり。昭和癸巳孟秋、志賀高原の客舎にて、夷齋學人敘

ワ
ビ

草人^{サウニンボク}木三冊、寛永九年壬申（一六三二）六月刊。草人

木はすなはち茶といふ字である。これは江戸の茶事の本として古いほうに屬する。わたしは茶事にはさつぱり通じない。またそれをたしなまうなんぞといふ酔興もともと無い。したがつて、ここに記すことはわたしの位置が茶の世界からいかに遠いかを示すことにもなるだらう。草人木の著者のなにものであるかは、専門の學者の考に俟つほかない。この三冊本は茶事の法式について初心の手引のために書かれてゐる。第一冊は行用篇、すなはち「此道數寄執心の輩に於て四季ともに行用すべき大體の旨すべて一百三十一ヶ條」の式目

を掲げる。第二冊は座敷、棚、床、その他かざり一般について圖をもつてこれを説く。第三冊はおなじく圖をもつて臺子の沙汰、袋棚のことをいふ。わたしがここに著目するところは、書中とくに謂ふところのワビについて述べてゐる部分である。

○むかしは茶湯に上中下の三段をわけたり。上は其身世にすぐれ或は其身に財あれば名物所持ある故に是を上とす。中は財あれども名の道具に不足なるか、あるひは道具あれども其身まとしければ是を中とす。下は財も道具もまとしき故に下とす。これを佗といふ。然れども、財寶道具ともにとぼしからざれども、茶湯下手なれば此道の下とす。たとひわびなりとも此道通達して茶湯に利根なるを此道の上手とす。さるによつて、いにしへは眞壺所持の人は人に御茶可申といひ、眞壺不持の佗は御茶可申とは云ざる也。しかはあれど

も、此道は茶を以て正道とす。何ぞまづばを持ざるとして正道のことばをうしなふべきやとて、中興より以來上中下をしなべて御茶可申といふ。尤も此儀速に可用。

(行用)

開卷まづワビの定義が下される。ワビとは身分上の規定であつた。茶をもつて正道とするとはいつても、道の上手下手に依つて身分の別が定まるのではない。

茶の世界に於けるイエラルシイもまた現實の世の中に於ける貴賤貧富のワリツケに對應してゐる。御茶申すべしといふことばはワビの使ひうるものではなかつたといふ。草人木の著者が正當に追認してゐるやうに、やがて上中下おしなべてこのことばを使ふに至つたとしても、ワビにとつては、それはことばの禁止が解かれたといふことである。身分に依つて使ふことを許されなかつたことばの例は他にもとほしくないだらう。

ただ右のことばの使用がもともと眞壺といふ道具の所持と不所持とに係つてゐたといふことは、注意しておいてよい。

茶の湯には亭主と客とがある。招かれた客は約をたがへてはならない。しかし、無斷にて遅刻もしくは不參のものにも、なほゆるしがある。いかなる身分のものがゆるされるのか。「主君を持てみやつかへの人か、醫師か、旦那持の出家か、あるひは一僕にも及ばざる佗人か、如此のたぐひ」である。「其身數ならざれども、此道すける人をばよぶならひなれば、佗人など、たとひまちても來らず、あまりをそき故に使をつかはしても來らざる趣申をいふとも、腹立すべからず。」といふ。けだし「茶湯約束して、其期にのぞみて、俄に去がたき用出來して人を待せ、其上に一僕にも不及る者は俄の用ありて左右をいふべき下人をも持ざる」がごとき身分のものだからである。このゆるしには由來が

ある。「天正の比ほひおはしませしやむごとなき御人の御免の一ヶ條也。それも一僕なりともある人の事にはあらず。たとひ一僕ありとても、佗人のたぐひはゆるすべし。此吟味は信長天王寺におはしませし時なんぼくの茶湯の歴々とより合ての免の一ヶ條也。」といふ。ワビビトがゆるされるのは、じつは「其身數ならざ」るがゆゑなのだから、ここでもやはり身分上のケヂメをくはされたことになる。「免の一ヶ條」は一僕をもつかもたぬかといふことに係つてゐる。すでに一僕すらもたない。手もとの道具に事を缺くのもやむをえないだらう。「羽箒と環と棚にかざれとにはあらず。道具もたざる佗より出たるかざりなれば、亭主の心次第也。」とある。そして、事を缺くのはかざりだけではない。「客座につきて亭主茶を立に出る時の衣服を初めと替る事もあり、又はじめと同色をきる事もあり。取去かへたるがよしとは亭主の身上の程によるか。又

佗ならば其ままにても苦しからずと、利休公の物語と去人のいはれし也。」とある。ここでもまたワビは「身上の程」を計算されることをまぬがれない。

「こい茶ばかり立て、其儘其茶入にて薄茶をたてず。」といふ。茶入をかへるといふ式證がある。したがつて、道具の吟味があり、主客の作法がある。「勝たる茶入唐物にて薄茶をたてば、忝き思召也といふ心の禮をすべし。名物持の客に古瀬戸のさしてもなきにて薄くたつるにも、客からは先御仕舞被成候へと申べし。一分のたしなむ道具なれば、名物持なればとて、いたかがほは無益也。今焼類なりとも、うやまふ禮はよし。又今焼位の茶入ならば、大事の茶をたくさんにといふべし。又高位などの佗に對して、さしたる道具にてもなきに、茶入かへよと仰らるは、茶をたすけ給ふ御言也。佗大名へ茶湯に参りて、御茶入かへさせ給へと申べからず。其時は一生界の思召有難しなど申すべし。佗大

名など茶湯に申入て、茶入かへよとあらば、一言にて替へし。苦しからず。佗に似合たる事也。」高位大名の仕打にさからはないことがワビの身に似合ふといふことらしい。この身のほどを越えないといふところに、ワビの作法が見つけられる。

○利休公のいへるは、佗の壹分にて所持したる今焼位の道具は、道具持の道具に似たるまじきなれども、其身一分の祕藏也。其上何たる道具も朝夕みればめづらしからず。たまなれば面白き物也。常にか不時かの茶なりとも、我心に祕藏の道具は出すべからず。あたらしき道具なりとも、其身一分の重寶ならば、祕して客を請じたる時出せば賞翫になる也。たとひさしたる道具にてあらずとも、二度茶をたつるに、初よき道具にて立、後の道具少不足なる道具出せば、祕藏の道具に威勢あるか。それもあまねく是非かへよにはあらず。

一分に付ての祕藏の道具の事と云と。尤此儀聞侍也。

ワビの身のほどは高く買つてもせいぜい「今焼位の道具」といふあたりに位取がつけられたやうである。一般に茶湯者の身分は道具に係り、道具に於て當人の一分があつたといふことは、ここにもう一度たしかめておいてよいだらう。

草人木の著者は、さらに第二冊におよんで、ワビの身分上の差別を判然とさせるやうな口吻をもつて敘述をすすめてゐる。たとへば、カコヒの床無きものについて説くにあたつて、つぎのごとくいふ。

○か様なる床のなき座敷に付て、當代人毎に大なる誤をいひ侍也。其言を聞に、さしたる道具にてもなき物などにて茶湯する人は床のせばきこそ本なれなどいひ、又は今焼などにて茶湯するすり切佗は一圓床のな

きこそ似合たるなどいふ人あり。此説一ゑん用べからず。其子細は、いか程すりきりたる佗にても、茶湯となればいかなる貴人高位も御出なさるゝ。是茶湯の威徳也。下賤の茶湯をあはれみ給ひて貴人高位の御出なされし事、日本に茶の始しより今に至る迄其例を思ふに書つくすべきいとまあらず。是道を道とし給ひし故也。其に付、貴人高位御出の時は、物をかざるばかりにてもなく、色と床に付てならひ口傳ども多し。か様なる儀どもをしらざる人の云説用べからず。床ありて悪といふ事もなし。せばき所をかつゝにかこひて床なければ是非に及ざる事也。

ワビにはワビの法があつてカコヒの床を廢したといふわけでは絶對にない。「貴人高位御出の時は」いろいろ床についてならひ口傳が多いといふ事情に依つて、また狭いところをかこはなくてはならぬといふ建築上

の要請に依つて、このやうな恰好になつたとある。これはワビなんぞのあづかり知らぬところなのだらう。それにしても、スリキリワビとは小氣味よいことばづかひである。ワビの「下賤」の面目あきらかである。その「下賤」のワビがなほカコヒに立入をゆるされるのは、貴人高位の「あはれみ」に依るといふ。それが「茶湯の威徳」なのださうである。茶席には身分の下を論ぜざるがごとき體にもてなしながら、じつは貴賤の差別をはつきりつけるといふところに、禮法の仕掛が見てとれる。たとへば釣棚のかざりを敍するくだりに、盆に茶入をのせてかざるにも、茶入のよしあしを問はず、貴賤おのづから道具のあつかひ方の相違あることが示されてゐる。

○是に大事のならひ侍也。たとへば貴人高官の御客なれば、今焼位にても新物にても盆にのせて置事あり。

惣而貴高の御客の参る茶具を、いか程いやしき道具にても、疊の上に置事は式目になき事也。殊更しつけ方に大に恥しめたる事也。天目は臺に其儘置、茶入を盆にのする事、是は道具なしの茶湯とてあさましき佗のわざ也。

本來ならば、天目も臺も茶入も、これをかざるときには盆一つに入れて置くことが式目なのではあるが、ワビなんぞは道具をもつことができないので、茶入ばかりを盆にのせるといふ。現實の世の中に於ける下賤のワリツケは、そのまま茶の世界に入つて道具なしといふかたちをとる。そして、これは「あさましき」ものとされる。さういつても、もともと下賤なればこそ、道具をもつことができないのではないか。この関係はあきらかに惡循環である。またこの関係は、道具持の側の利益に於て、逆に茶の世界から現實の世の中のワ

リツケに通用する。下賤があさましいのか、道具なしがあさましいのか、われわれはこれを知らない。ただこの惡循環はどうもあさましきもののやうである。しかし、つねに道具をめぐるころのこの惡循環の仕掛は、また道具をもつてこれを破ることができる。身分上に於ける茶道具の意味がいか政治的に利用されたかといふことは、われわれは茶事の歴史の中にその實例をさがすことができるだらう。草人木の著者はさらに貴賤禮法の別について説明の蛇足をつけてゐる。

「茶湯の道に貴人高位をあひしらふと云は」たれでもわきまへてゐるやうな尋常の禮式ばかりではない。なにももつて禮とするかといへば「道具の取置にて人をたつとむ事をしりぬ。去によつて貴高の御客なればのるまじき天目も臺にのせ、すはるまじき茶入も盆にする。下賤の客なればのすべき天目も下にをき、すゆべき茶入も平地に置は、是上下をわくる次第也。」と